Bull. Mukogawa Women's Univ. Humanities and Social Sci., **42**, 17－22(1994)
武庫川女子大紀要（人文・社会科学）

solstice について

稲　毛　理津子
（武庫川女子大学文学部英米文学科）

On *Solstice*

Ritsuko Inage
Department of Anglo-American Literature

Joyce Carol Oates' new novel, *Solstice* is a story about friendship between two women and the way the women perceive it. *Solstice*'s two main characters, Monica Jensen and Sheila Trask, are close in age but different in other ways. Sometimes their role of friendly relationship changes as nature does from the summer solstice to the winter solstice. But a cold, dark, obsessed artist Sheila domineers a golden, summery Monica. From the moment of their first meeting, Monica seems to drop the thread of her own life to pick up Sheila's clues, like Ariadne's Thread in Greek Mythology. Emily Dickinson's poem chosen as the epigraph seems to cast a shadow of "hour of lead" to this story. I would like to analyze how effectively Oates describes such a relationship between the two women, using the Greek Myths and Emily Dinkinson's poem.

序

ジョイス・キャロル・オーツ（Joyce Carol Oates）は，愛の万華鏡といってよいような，さまざまな人間関係における愛を描き追求してきた．例えば *Wonderland* の Jesse（父）と Shelley（娘），*You Must Remember This* の Felix（叔父）と Enid（姪）の愛，*I Lock My Door Upon Myself* の白人女性と黒人の駆け落ちなどである．人間の中にある二元性に葛藤しながら，女性の側から，執拗と言えるほど，愛について描き続けた．これほどその立場に固執して描いた作家は少ないのではないだろうか．18，9 世紀の女性作家は「感傷小説」「家庭小説」といった傾向が強く，社会的にも献身的な妻，良妻賢母型の女性が理想とされ，19 世紀初頭に既に女権拡張運動があったとは言え，例えば，Kate Chopin の *The Awakening*（1899）が新しい女性，自立する女性といった意味で厳しい開拓者の道を踏まねばならなかった．1920 年ようやく，婦人参政権が認められ，1960 年代女性解放運動が盛んになった．1970 年代にはウーマンリブ運動がおこり，男女の社会的地位，関係だけでなく，アメリカ小説にも大きな影響を及ぼしたと言われている．陽の当る舞台に登場するのは主として男性作家に描かれた女性像であった．アメリカの女性作家はそれまでは，黒人作家やユダヤ人作家と同様にアメリカ文学界のマイノリティだった．ようやく今改めて女性作家の存在の意味が問われ始めたのではないだろうか．ちなみに日本でも儒教の時代また戦国時代には文学史上華々しく女性作家が出現しがたかったことが想起される．オーツ自身は女性作家のカテゴリーに入れられることを不満としているが，意図せずして，女性の側から女性を描いたように思われる．本稿ではオーツの *Solstice* に現れる 2 人の女性 Monica と Sheila の描写を通じて，オーツの，女性と女性の人間関係，この場合，愛に近い友情観を抽出し，エピグラフに選ばれた Emily Dickinson の詩，また更にギリシャ神話の一つとのストーリーとの関連がいかに巧妙に機能しているかに注意しながら，*Solstice* について考えてみた．更に流動的な人間関係そして人間性の内部への解明へのオーツの試みを考えてみたい．その際，オーツの人間の"心"のイメージとして，"迷路"が考えられ，オーツの作品から読み取ることができるその脱出法としておよそ次の 3 点にまとめてみた．1. 二元的な考えかたによって．2. 変身への願望によって．3. 更にそのまま迷路をさまよい続けることによって．

1. *Solstice*

1984年E. P. Dutton社から出版されたこの作品は，女性同士の友情を扱った作品だと思われている．'Catherine Petroski は Saturday Reviw で a story about a friendship between two women'[1] と述べ，Library Journal でも 'the ghoulish underside of a friendship'[2] と評されているように，大方の意見も一致している．しかし出版年の新しさから解釈が多くないと思われるので，ストーリーの概略を述べ，友情に論を進めたい．この物語は前述したように，Glenkill Academy へ赴任して来た教師である Monica Jensen と画家である Sheila Trask の人間関係が中心に描かれている．7年に渡る結婚生活，その破局後，30才を迎えようとしている Monica と，彫刻家と画家という芸術家同士の結婚をし今 Morton Flaxman の未亡人となっている Sheila．2人の人物は fluid で，決定的な性格づけは難しいがどちらかと言えば，Monica の方が，着実で教師としてもテキパキと事務的に仕事を片付けていくタイプで，Sheila は芸術的で事務的能力はほとんどなく，裕福で，Academy の trustee 理事会のメンバーで，奔放で物おじせずものを言うタイプの人物である．2人とも対照的とでもいえる性格だが，どちらも美しく{特に，Sheila は40代後半で目だった目（slightly potuberant eye）を持ち魅力的である}2人の始めての出会いはぎこちないものであったが，思いもかけない郵便局で再開から，p. 30 の冒頭にあるように So it began. なのである．つまり2人の交際が始まる．2人は何度も訪問を繰り返し，（特に Monica の方が Sheila を）親密度を増して行く．そして Sheila が Monica に pub-crawlling を説得しまるで労働者階級の離婚経験者のように扮装して名前も Sherrill Anne, Mary Beth と変えてパブに出入りし Sheila が Monica と車による男性の追跡をかろじて免れるといった violence にあって以来，遊びは終わる．その後絵画の制作で行き詰まっている Sheila を慰めようとする Monica．いくら連絡を取ろうとしても取れない Monica は Sheila に対する嫌悪の気持ちを持ったまま故郷に帰り，holiday season を家族とともに過ごす．モロッコから帰国した Sheila とふたたび再会した Monica は labyrinth，心の迷宮へ迷い込む．またもや Sheila を気遣い Sheila の New York での個展に向けて交渉から財産管理まで引き受けてしまう．個展の前の Sheila の突然のディナーパーティの決行（pp. 192–200）．個展の大成功（pp. 202–203）．ディナーパーティで知り合った Hen に rape された Monica は，diarrhea が続きすっかり衰弱してしまう．今や Peck という名前の新しい恋人が見つかり二人で南極へ行く予定の Sheila．彼女に付き添われて乗っている救急車の中で Monica は Sheila の言葉 "You shouldn't do this—you shouldn't have doubted me—we'll be friends for a long, long, time," she says, "— unless one of us dies."[3] を聞く．そこで物語りは終結している．

以上ストーリーを概略したが，2人の関係が変化したのは，いくら連絡を取ろうとしても，取れなかった Monica がすっかり諦め，Sheila に対する腹立ちを感じながら故郷に帰る間だけではなかったろうか．つまり，2人のあいだではバランスがどちらかと言えば，常に Sheila に重さが置かれがちで，lead されるのは Monica であって，equilibrium（*Wonderland* の中で何度も繰り返し用いられたが，homeostasis とも関係があり，均衡，力の釣り合い，平衡）が保たれなかった．まるで太陽のような明るさを持っていた Monica，対照的に闇，夜の妖艶さを持っていた Sheila が至（太陽が北または南に最も遠く離れる時点＝ solstice）のように，fluid に2人の関係が，この車による尾行事件と連絡不能をきっかけに変化する．常識派の Monica は equilibrium を救うのが自分の priviledge と考える．しかし，あくまで Ariadne の糸を操るように，支配権を持っていたのは，Sheila ののように思われる．ところで，2人お友情にはほとんど erotic な描写はないが，

That night she (Monica) dreamt of the most extraordinay painting, fluid, three-dimensional, throbbing with life: Sheila's painting, perhaps, but only partly imagined, still in the process of being transcribed. Monica was staring at the painting yet at the same time she was in it; swimming in its sweet radiant warmth, in its fleshy-sweet erotic warmth; scarcely daring to breathe because the sensation was so exquisite, so precarious so forbidding.[4]

といった友情以上のものを暗示する個所がある．

このことに対してオーツ自身がそのインタビューで答えている言葉"One dominates the other and opposite happening"[5]や「他人を距離を置いて見ている場合はstable personalityを持っているように見えるが，もっと接近すると非常にfluidで，流動的で，不安定で，お互いに支配の関係が交替し合う」[6]を想起すると，2人はその支配関係をMonica, Sheila—Sheila, Monica—Monica, Sheila—Sheila, Monica—Sheila, Monicaといったように主従を交替させ，その間柄を続かせたと見ることもできよう．また昼のイメージのMonica，夜のイメージのSheila，その昼と夜の二元(しかし朝を含めた三元ではない)を一人の人間の2面として考えることもできよう．この立場に立つとき，この物語は一人の人間の魂の相克劇と考えることもできる．こういった二元的な構想についてHarold Bloomも次のように指摘している．

Dark dualistic design stalks Oates's haunted mind as starkly as it did Hawthorne's, but with more sheer emotional power and force:"In the novels I have written, I have tried to give a shape to certain obsessions of mid-century Americans—a confusion of love and money, of the categories of public and private experience of demonic urge I sense all around me, an urge to violence as the answer to all problems, an urge to self-annihilation, suicide, the ultimate experience and the ultimate surrender. "Dualism becomes a dominant demonic force, that if outrun, suggests both an ultimate freedom and ultimate self-destruction.[7]

そしてこの二元的な見方はオーツが現代アメリカ人の心の'混沌'として身辺に嗅ぎ取ったものを表象したもので，二元性も度がすぎると，究極の自由，究極の自己破壊を暗示する悪魔的な暴力になる，という．

2. 心の迷路

以下ギリシャ神話をいかに巧妙に下敷きにしてプロットと絡み合わせているか，具体的に検討していきたい．'Ariadneの糸'はSheilaが製作している絵画シリーズの題名で，The series was called "Ariadne's Thread." It had to do, Sheila explained, with the idea or memory of a labyrinth, not the actual labyrinth— "in which," Sheila said mysteriously, "we don't always believe."[8]その中の迷路は実際の迷路でなく観念あるいは記憶，心の迷路であることが説明され，その他のところでも，Ariadne's thread: the labyrinth as a state of mind, a region of the soul: heroic effort without any Hero at its center "This is only about Ariadne's thread, this has nothing to do with Theseus, Sheila said[9]と言及され，神話との繋がりを部分的に否定しているようだが，迷路は心，魂といった領域に関してであることが，強調されている．ちなみに，ギリシャ神話によると，クレタ王ミノスの娘が怪物ミノタウロスの人身御供に行くテセウス(Thesus)と恋に落ち彼に糸のまりを与えて道しるべとして迷宮(labyrinth)からの脱出を助けた．(テセウスはミノタウロスを退治し無事に迷宮を脱出することができた．ところが，テセウスはアリアドネをナクソス島に置き去りにしてその恩を仇で返した)．さて，本文中その他のところでは，"ARIADNE'S THREAD has snapped, and now the poor creature is wandering in the labyrinth," Sheila said, yawning and stretching. "But she'll emerge. One day soon. She always has in the past. Otherwise she'll starve, she'll suffocate, to hell with her." "If there is anything I can do..." Monica said hesitantly. Sheila laughed. Then she said, soberly: "You're so kind, Monica. But thank you, no, I don't believe there is anything you can do. Just be."[10]と描写され，「もしこの迷宮を彼女が抜け出せないなら，彼女は飢えるだろう」とSheilaはMonicaに謎めいた言葉をかけるが，実際Monicaが最終章で餓死の状態に陥ることの伏線とも考えられる．そして皮肉にもこの時手助けを申し出るMonicaこそ最終章のタイトルlabyrinthのように(友情)の糸を切られて迷宮に迷い込んでいくようだ．次には，ARIADNE'S THREAD, the secrets of labyrinth, the convolutions of the human brain.... The canvases were to be completed and taken away, by van, in twelve days. Monica was on the telephone a half-dozen times in a single morning, making arrangements; her throat was hoarse with arguing.[11]とAriadne's threadが，単にSheilaの絵のタイトルであること，そして副題として，迷宮の秘密，人間の頭脳の回旋と名ずけられている事が述べられる．次にThe clock ticked, Monica went limp, an old strategy, an old wifely habit. She was thinking of Ariadne's thread. You took hold of it, you trusted to it, and then it snapped in your fingers... She was thinking of something dreamy and fluid, an element through

which one had to thrust oneself, with great effort. The danger of suffocation, of a heart stopping in midbeat... [12] の部分があるが，ここでは rape されて横たわっている Monica が，Ariadne's thread について考えているところで，この中の you は自分自身への語りかけで，自分で Ariadne の糸を信じさぐっていたのに手の中でぷつんと切れてしまった事，そして次の suffocation への連想は前述の suffocate とつながり Ariadne の糸は Sheila の糸を暗示するようだ．Sheila は vampire のように，個展の前に Monica の教師としてのエネルギーを使い果たさせ，食欲，生きる意志さえ奪った．この死に瀕した Monica はまるで winter solstic（冬至）のようで，それは一年において一番短い昼でいわば静止のポイントである．solstice の語源は L. sol（the sun）と L. stare, statsu（to stand）から成る．solstitium（the standing still of the sun[13]）である．自然の季節の流れのように，今後生命に溢れる春を暗示するのだろうか．本文中で言及されている winter solstice は，She（Monica）stares at the reatureless sky, a gray corrugated landscape. It is the winter solseice, such misery, but now the sky must yield to light, to warmth, the new year, to life; or so the legends promise. [14] で，みじめな暗い冬のあと，言い伝え（legend）によると生命の新しい年が来る，という個所である．この物語が始まるのは9月の終わりであり終結するのは5月の終わりである．太陽の赤径が最も大きく，北半球では昼が最も長い6月の夏至を待たずに終わる．そして4章，1. The Scar 2. The Mirror-Ghoul 3. "Holiday" 4. The Labyrinth に分けたこの物語は深層部では2人の友情を symbolize していると思われる．表面的には1章の scar は Monica が夫から受けたあごの所の傷であり，2章の Mirror-Ghoul（イスラム教国では墓をあばいて死肉を食うと言われている食屍鬼）と言うのは，一種のゴシック風好みの比喩であって，本文中の she（Sheila）pulled Monica more closely beside her, so that the two of them faced the window. "One a death's head, the one so blood. It must be the genes, the cheekbones. The soul poking out through the skin. Or is the soul skin? Everything on the surface, everything in two percise dimensions, as it should be. Good night, and Merry Christmas!" [15] に良く表現されているように，2人の顔と心についておぞましく例えたあたりからだろう．そして3章の holiday はまさに Christmas Holiday の期間を中心としている．4章の labyrinth は Sheila の labyrinth という絵画シリーズの完成と個展の成功から章名を付けられたという解釈が成り立つだろう．しかし前述したように，深層的に探ってみると，1. scar は傷を暗示する出会いを，2. Mirror-Ghoul は Sheila の Monica に対する優位を，そして食屍鬼のように Monica を取り込んでいく関係を，3. holiday は2人の交際が途切れて逆に訪れる平穏な休息期間を，4. labyrinth では再会と再び迷路に踏み込んでいく友情を symbolize していると思われる．それにしても Monica が Ariadne の糸を探り当てたのは恐らく次の個所であろう．Monica was staring at the painting yet at the same time she was in it; swimming in its fleshy-sweet erotic warmth; scarcely daring to breathe because the sensation was so exquisite, so precarious so forbidding.[16] 自分が Sheila のキャンバスを "see" 見ているのではなく，その中に "is" 存在している事に気付く所である．その甘美な認識はエピファニーの瞬間とでも言える．"見る"存在でなく"見られる"存在，言わば"支配者"でなく"被支配者"の立場を甘受した瞬間の至福であろう．ある意味で友情の極限の grasp ではないだろうか．だが，その時もつかの間で，またしても Sheila にその糸を切られてしまう．それゆえ，その事はこの物語の冒頭に捧げられた Emily Dickinson の詩を想起させ，

After great pain, a formal feeling comes—	ひどい苦しみの後，うわべだけの感情が生まれる—
The Nerves sit ceremonious, like Tombs—	墓標のように，神経は重々しく坐る—
The stiff Heart questions was it He, that bore,	こわばった心が尋ねる，耐えたのは，あのひとなの，
And Yesterday, or Centuries before?	それは昨日のこと，それとも数世紀前だったの？
The Feet, mechanical, go round—	足は，機械的に，歩き回る—
Of Ground, or Air, or Ought—	無表情な道を
A Wooden way	地面だろうと，空だろうと，どこだろうと—
Regardless grown,	むとんちゃくに
A Qartz contentment, like a stone—	石みたいに，石英的な満足—

This is the Hour of Lead—	これは鉛の時間なのです
Remembered, if outlived,	生き残ったときに，思い出す，
As Freezing persons, recollect the Snow—	凍死する人達が，雪を思い出すように—
First—Chill—then Stupor—then the letting go—[17]	始め—寒けを—それから麻痺を—それから気を失うのを—[18]

“鉛の時間”，痛みはないが，生き残った感覚もない，鈍く，重苦しい忍耐の時と Tombs，死の響き，死への抗しがたい誘いがその中から立ちのぼって来る．特に最後のスタンザはオーツがディキンソンの詩を借り Monica のために捧げているように思われる．また物語全体のトーンの中にも suicide という言葉が頻出するように，苦しみの色調がある．Sheila の側にも，死別した夫とは別の芸術創造 (creation of art) のための powerful egoism が必要とされ，nervous breakdown の苦悩に満ちる時がある．

結

オーツは，19 世紀までの登場人物を manipulate する大抵の作家の立場のように，神の救いがあり，神の摂理の下にあるはっきりとした世界像の中でというより，fluid な捕らえ難い人間性をそのままに，人間の内面を忠実に描写することを試みたと言えよう．そして魂の混沌状態を混沌のままに描きつつ，何か新しい世界を模索する陣痛の苦しみをたたえ(オーツ自身，著作の苦しみをそのように喩えている)ている．そして魂の世界に沈潜すればするほど，出口のない，魂の迷宮にはまりこむ．この作品では以上検討してきたように，序に述べたオーツの作品から読み取ることのできる心の“迷路”の脱出法を以下の 3 点にまとめてみた．(1) 二元的な考えかたのバランスと言うのは，Sheila と Monica に象徴される 2 つの相反するもの，この場合(陰)と(陽)のバランスが取れること (2) 変身への願望は Sheila と Monica が名前も Sherrill Anne, Mary Beth と変え扮装してパブに出入りする個所に見られるが，現在の苦境を脱出するための一つの手段 (3) 更にそのまま迷路をさまよい続けることによって，といった具合である．Alfred Kazin は，「オーツの小説は彼女に取り憑いた魂を彼女の心から追い出すために書かれるのであって，何かを創りだすために書かれるのではない．…エンディングには，我々の精神を高揚するところがない．彼女は脱出したにとどまってその後の展望がなく，依然として彼女は空虚のままであり，真の自我を見出し確立できるとは思わない」[19] と評するが，確かに我々を混乱させ，時に構成上のまとまりに欠けたり，いわばオーツ独特の取り込まれていく世界に取り込まれるところがある．それ故何か新しい世界，新しい展望が開かれないと見る立場と，苦悩の果てのエンディングに何か新しい出発を暗示するきざしがあり，ほのかな曙光を見出そうとする二通りの解釈が成り立つ微妙さを残す．

注

1) Petroski, Catherine, *Saturday Review*, 11 (Mar.–April 1985) 61.
2) *Library Journal* (Feb. 1, 1985).
3) Oates, Joyce Carol, *Solstice* (New York:E. P. Dutton) p. 243 (1985).
4) Ibid., pp. 200–201.
5) Joyce Carol Oates reads from *Solstice* and talks about seasonal mood changes and artistic vampirism with host Tom Vitale, from radio program titled A Movable Feast.
6) 上記の和訳.
7) Oates, Joyce Carol, op. cit. p. 119.
8) Ibid., p. 37.
9) Ibid., p. 53.
10) Ibid., p. 106.
11) Ibid., p. 203.
12) Ibid., p. 216.
13) 梅田　修『英語の語源辞典』大修館書店東京 P. 357.

14）Oates, Joyce Carol, op. cit. pp. 116–117.
15）Ibid., p. 114.
16）Ibid., p. 201.
17）エミリ・ディキンスンの No. 341 の詩.
18）（中林　孝雄）『エミリ・ディキンスン詩集』松拍社，東京 PP. 86–87.
19）Kazin, Alfred. *Bright Book of Llife*, New York : Atlantic & Little Brown, 1973.

＊二元論：互いに他に還元することのできない二つの原理の対立を認め，それによって宇宙の成り立ちを説明する宗教上，哲学上の立場であって，一元論と対立する．宗教上の二元論としては，光と闇との二原理が世界の成立要素であると同時に，善悪の価値的対立の根源であることを教えた古代ペルシャのゾロアスター教をあげることができる．古代末期のグノーシス派やマニ教においても善と悪との 2 原理の対立が強調され，マニ教の教説は 12－13 世紀のアラビアの異端のうちに残っている．キリスト教はこれら善悪の二元論を善なる神の絶対性の主張によって克服するものであるが，しかし神と世界（人間），理想と現実との分裂を強調する限り，やはり二元論的性格を持つ．それは万物に神が内在すると説く汎神論的一元論と異なり，神の超越を重視する．（『世界大百科事典』（23 巻）平凡社，東京，p. 236 参照）オーツの場合，特に宗教的哲学的色彩はないが，二つの根本的に対立するもの，ぐらいの意味である．